

琉球大学学術リポジトリ

第2部自己点検・評価の結果

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42150

第3章 授業（2）－学生に関すること－

本章に関しても、学生に対してアンケート調査を行った。調査は琉球大学の学生2487人を対象に、1、2年生のほとんどが受講する英語総合演習Ⅰ（1組～43組）の時間を利用していっせに行った。調査期間は平成12年5月8日から5月19日の間である。有効回答者数は1946人、回収率は78.2%であった。

以下、このアンケートの結果を、「1. 学生の属性に関すること」、「2. 共通教育等に対する意識に関すること」、「3. 授業への取り組みに関すること」の三つに大きく分けて、検討していきたい。

1. 学生の属性に関すること

1) 年次

1年次の学生が一番多く1315人で全体の67.8%を占め、次に多いのが2年次の学生の476人で24.5%、3番目が3年次の学生の89人で4.6%、一番少ないのが4年次の学生で60人であり、これは3.1%である。

表Ⅱ-3-1 年次別構成

1年次	2年次	3年次	4年次	計
1315人 (67.8%)	476人 (24.5%)	89人 (4.6%)	60人 (3.1%)	1940人 (100%)

2) 学部

法文学部の学生が最も多く672人で34.7%、次に多いのが工学部の学生の531人で27.4%、3番目が理学部の217人で11.2%、4番目が農学部の209人で10.8%、5番目が教育学部の169人で8.7%、一番少ないのが医学部の学生の141人で7.3%である。

表Ⅱ-3-2 学部別構成

法文学部	教育学部	理学部	医学部	工学部	農学部	計
672人 (34.7%)	169人 (8.7%)	217人 (11.2%)	141人 (7.3%)	531人 (27.4%)	209人 (10.8%)	1939人 (100%)

3) 性別

回答した学生のうち男性は1197人（62.1%）、女性は730人（37.9%）である。

4) 出身 (沖縄県/県外)

回答した学生のうち沖縄県の出身者は1289人 (67.2%)、県外の出身者は628人 (32.8%)である。

5) 身につけている能力 (問5)

アンケートでは、問5で、学生が今現に身につけていると考えている能力について尋ねた。表Ⅱ-3-3はその集計結果である。

表Ⅱ-3-3 身につけている能力 (問5)

	十分身につけている	ある程度身につけている	あまり身につけていない	全く身につけていない
一般的な教養	66人 (3.4%)	1129人 (58.3%)	683人 (35.3%)	58人 (3.0%)
語学力	27人 (1.4%)	461人 (23.8%)	1166人 (60.2%)	283人 (14.6%)
国際感覚	41人 (2.1%)	325人 (16.8%)	1153人 (59.6%)	414人 (21.4%)
情報処理能力	56人 (2.9%)	461人 (23.8%)	934人 (48.3%)	482人 (24.9%)
創造力	179人 (9.2%)	741人 (38.3%)	855人 (44.2%)	161人 (8.3%)
忍耐力	341人 (17.6%)	1029人 (53.2%)	460人 (23.8%)	105人 (5.4%)
統率力 (指導力)	78人 (4.0%)	448人 (23.2%)	1033人 (53.4%)	374人 (19.3%)
協調性	326人 (16.9%)	981人 (50.7%)	507人 (26.2%)	120人 (6.2%)
チャレンジ精神	304人 (15.7%)	886人 (45.9%)	642人 (33.2%)	100人 (5.2%)
幅広い対応力	115人 (5.9%)	739人 (38.2%)	972人 (50.3%)	107人 (5.5%)
問題解決能力	88人 (4.5%)	810人 (41.8%)	940人 (48.6%)	98人 (5.1%)

「十分身につけている」と「ある程度身につけている」の合計の割合で見ると、琉球大学の学生の6～7割は、「忍耐力」「協調性」「一般的な教養」「チャレンジ精神」を現に身につけていると回答している。

反対に、「統率力 (指導力)」「情報処理能力」「語学力」「国際感覚」は、1～3割弱の

学生しか身につけていないと回答している（なお、66頁の「5）共通教育等への期待（問6）」において示すように、「情報処理能力」、「語学力」、「国際感覚」を身につけたいという学生の要望は高い）。

6）高校時代の学習等（問7）

高校時代の学習の様子について、問7で尋ねた。表Ⅱ-3-4はその集計結果である。

表Ⅱ-3-4 高校時代の学習（問7）

	あてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
授業にきちんと出席した	1454人 (74.7%)	323人 (16.6%)	112人 (5.8%)	57人 (2.9%)
学校の授業の予習・復習 や宿題をきちんとした	224人 (11.5%)	714人 (36.7%)	628人 (32.3%)	378人 (19.4%)
大学入試のために多くの 時間を割いた	828人 (42.5%)	528人 (27.1%)	403人 (20.7%)	187人 (9.6%)
自分の興味のあること についてよく学習した	856人 (44.0%)	683人 (35.1%)	336人 (17.3%)	70人 (3.6%)
就きたい職業や関心のある 分野が決まっていた	785人 (40.4%)	497人 (25.6%)	379人 (19.5%)	283人 (14.6%)
よく読書をしたり、手紙 を書いたりした	329人 (16.9%)	435人 (22.4%)	599人 (30.8%)	583人 (30.0%)
趣味や遊びをよくした	941人 (48.4%)	617人 (31.7%)	322人 (16.5%)	66人 (3.4%)
アルバイトを熱心にした	72人 (3.7%)	123人 (6.3%)	254人 (13.1%)	1496人 (76.9%)
部活動を熱心にした	642人 (33.0%)	334人 (17.2%)	316人 (16.2%)	653人 (33.6%)
お稽古ごとに熱心に打ち 込んだ	89人 (4.6%)	148人 (7.6%)	306人 (15.7%)	1401人 (72.1%)
家業や家の手伝いをよく した	209人 (10.8%)	497人 (25.6%)	727人 (37.4%)	511人 (26.3%)
ボランティア活動を熱心 にした	63人 (3.2%)	153人 (7.9%)	460人 (23.7%)	1269人 (65.2%)
外国人や外国文化に接す る機会がよくあった	154人 (7.9%)	258人 (13.3%)	432人 (22.2%)	1101人 (56.6%)

「あてはまる」と「ある程度あてはまる」を合計した割合で見ると、6割以上の学生は、高校時代、授業にきちんと出席しており、趣味や遊びもよくやり、興味あることの

学習や受験勉強もよく行っている。就きたい職業や関心のある分野が決まっていた者も6割を越えている。

反対に、外国人や外国の文化に接する機会、お稽古ごと、ボランティア活動は選択率が1～2割と低く、これらを経験していない学生が多い。

7) 入学動機 (問8)

琉球大学への入学動機について、問8で尋ねた。表Ⅱ-3-5はその集計結果である。

表Ⅱ-3-5 入学の動機 (問8)

	とても重要だった	ある程度重要だった	あまり重要でなかった	全く重要でなかった
入試の難易度	498人 (25.6%)	727人 (37.4%)	454人 (23.4%)	264人 (13.6%)
大学の個性や知名度	240人 (12.4%)	581人 (30.0%)	698人 (36.0%)	420人 (21.7%)
大学が沖縄に所在すること	1111人 (57.2%)	486人 (25.0%)	167人 (8.6%)	177人 (9.1%)
キャンパス周辺の環境	183人 (9.4%)	316人 (16.3%)	805人 (41.4%)	639人 (32.9%)
キャンパス内の環境	186人 (9.6%)	421人 (21.7%)	748人 (38.5%)	588人 (30.3%)
大学の教育方針	127人 (6.5%)	432人 (22.2%)	783人 (40.3%)	601人 (30.9%)
興味のある学部・学科があること	1141人 (58.7%)	504人 (25.9%)	160人 (8.2%)	138人 (7.1%)
学びたい先生がいること	91人 (4.7%)	181人 (9.3%)	638人 (32.9%)	1030人 (53.1%)
家族や友人の、先生の勧め	252人 (13.0%)	463人 (23.8%)	494人 (25.4%)	733人 (37.7%)
学費や経済的条件	919人 (47.4%)	583人 (30.1%)	197人 (10.2%)	240人 (12.4%)
将来の職業との関連	766人 (39.4%)	589人 (30.3%)	329人 (16.9%)	258人 (13.3%)
受験科目や入試の方法	535人 (27.5%)	591人 (30.4%)	452人 (23.3%)	366人 (18.8%)

「とても重要だった」と「ある程度重要だった」を合わせた割合で見ると、琉球大学に受験・入学するにあたって、8割を越える学生が、興味のある学部・学科があることと大学が沖縄にあることを重視し、また、将来の職業との関連も7割近くの学生が重視してい

る。

しかし、大学の教育方針を重視したと答えた者は3割弱、学びたい先生がいることをあげた者はこの中では最も低い14.0%でしかなく、その理由が何であるのかは検討を要するように思われる。

8) 学生生活 (問14)

問14では、入学後学生生活を送る中で、学生がどのようなことに熱心に取り組んでいるかを調べた。表Ⅱ-3-6はその集計結果である。

表Ⅱ-3-6 学生生活 (問14)

	とても熱心に取り組んでいる	ある程度熱心に取り組んでいる	あまり熱心に取り組んでいない	全く熱心に取り組んでいない
大学の学習	205人 (10.6%)	1177人 (60.6%)	498人 (25.6%)	62人 (3.25%)
大学以外の学習 (お稽古ごと等含む)	135人 (7.0%)	349人 (18.2%)	588人 (30.6%)	849人 (44.2%)
アルバイト	209人 (10.9%)	567人 (29.6%)	375人 (19.6%)	766人 (40.0%)
サークル・クラブ活動	244人 (12.7%)	333人 (17.4%)	286人 (14.9%)	1055人 (55.0%)
ボランティア活動	26人 (1.4%)	78人 (4.1%)	368人 (19.2%)	1445人 (75.4%)
趣味や遊び	668人 (34.4%)	875人 (45.1%)	310人 (16.0%)	87人 (4.5%)
大学主催の懇談会や合宿研修会への参加	95人 (4.9%)	322人 (17.3%)	529人 (27.5%)	967人 (50.3%)
大学主催の体育祭への参加	63人 (3.3%)	255人 (13.4%)	574人 (30.1%)	1016人 (53.2%)
学内美化	50人 (2.6%)	310人 (16.0%)	668人 (34.6%)	904人 (46.8%)
交通安全・マナー	436人 (22.5%)	881人 (45.4%)	391人 (20.2%)	232人 (12.0%)

この表も、「とても熱心に取り組んでいる」と「ある程度熱心に取り組んでいる」を合わせた割合で見えていくと、趣味や遊び、大学の学習、交通安全・マナーに関しては6割以上8割近くの学生が熱心に取り組んでいる。特に「趣味や遊び」と「大学の学習」は共に7割を越えており、琉球大学の学生は趣味・遊びと学習の両方に熱心に取り組んでいる者が多い。

反対に、サークル活動、大学外での学習、大学主催の懇談会や合宿研修会、学内美化、体育祭、ボランティア活動は3割以下の者しか選んでおらず、これらに対しては学生はあまり熱心ではない。

9) 考え方・行動 (問15)

問15では、学生の考え方や行動について尋ねた。表Ⅱ-3-7はその集計結果である。

表Ⅱ-3-7 考え方・行動 (問15)

	とても あてはまる	ある程度 あてはまる	あまり あてはまらない	全く あてはまらない
目標を達成するには能力よりも努力が大切である	796人 (41.2%)	952人 (49.2%)	162人 (8.4%)	24人 (1.2%)
よく図書館を利用する	341人 (17.6%)	683人 (35.2%)	657人 (33.9%)	258人 (13.3%)
自分の能力に自信を持っている	135人 (7.0%)	499人 (25.8%)	993人 (51.3%)	309人 (16.0%)
学習することは楽しい	306人 (15.8%)	948人 (48.9%)	553人 (28.5%)	130人 (6.7%)
やればできると思っている	765人 (39.5%)	934人 (48.2%)	206人 (10.6%)	33人 (1.7%)
学習することは重要である	1033人 (53.3%)	821人 (42.4%)	68人 (3.5%)	16人 (0.8%)
わからないことがあれば徹底的に調べる	343人 (17.7%)	861人 (44.5%)	656人 (33.9%)	73人 (3.8%)
自分の生き方に自信がある	280人 (14.4%)	568人 (29.3%)	870人 (44.9%)	220人 (11.4%)
自分の毎日の生活にはりがある	233人 (12.0%)	667人 (34.4%)	798人 (41.2%)	241人 (12.4%)
現在熱心に取り組んでいることがある	624人 (32.2%)	538人 (27.8%)	562人 (29.0%)	213人 (11.0%)
学習意欲が高い	254人 (13.1%)	800人 (41.3%)	735人 (38.0%)	146人 (7.5%)
授業には積極的に参加している	556人 (28.7%)	860人 (44.4%)	446人 (23.0%)	75人 (3.9%)
授業には休まず出席している	883人 (45.6%)	674人 (34.8%)	289人 (14.9%)	91人 (4.7%)

「とてもあてはまる」と「ある程度あてはまる」の割合を合計し、6割を越えた項目で

見てみると、学生は概して、学習することを重要と考え、目標達成のためには能力よりも努力が大切であると考え（この2つは9割を越えている）、やればできるとしており、授業には休まず、積極的に参加し、学習は楽しいと感じている。

しかし、毎日の生活にはりを感じており、自分の生き方に自身がある学生の割合は減少して4割台であり、自分の能力に自身がある者は3割強になっている。

10) 希望進路（問16）

問16では学生の卒業後の進学、就職等の展望について尋ねた。表Ⅱ-3-8はその集計結果である。

表Ⅱ-3-8 希望進路（問16）

専門を生かした仕事に就きたい	1050人 (55.8%)	家事を手伝いたい	2人 (0.1%)
専門とは関係のない仕事に就きたい	107人 (5.7%)	結婚して家庭に入りたい	19人 (1.0%)
大学院に進学したい	393人 (20.9%)	まだわからない	265人 (14.1%)
とりあえず就職を目指す、定職に就く気はない	11人 (0.6%)	考えていない	36人 (1.9%)

将来は「専門を生かした仕事に就きたい」と考えている学生が55.8%おり、「大学院に進学したい」を選んだ者も20.9%いる。「まだわからない」と答えたものが14.1%、また少数ながら「考えていない」者も1.9%いる。回答者の9割以上が1、2年次の学生であることを考えると、これは調査時点ではやむを得ないとも言えよう。

2. 共通教育等に対する意識に関すること

1) 共通教育等の理念の理解（問1）

問1では、共通教育等（教養教育）の理念について学生がどのような理解を持っているかを調べた（理念としてあげた9項目については、詳しくは「第2章 授業（1） 教員に関すること」32～33頁、参照）。表Ⅱ-3-9はその集計結果である。回答の仕方は、（1）～（9）の選択肢に対して、当てはまると思うものをいくつでも選んで○をつけるというものである。これらの9項目は、「学校教育法」や「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（大学審議会答申、平成10年10月26日答申）等において述べられているものを中心に検討し、まとめたものであり、すべて正解である。

これらの9項目は、今述べたように、共通教育の理念として考えられるもので、すべて正解である。したがって、多くの学生が選んでいればいるほど、その項目は学生には共通教育等の理念であると考えられていることになり、反対に選んでいる学生が少ない項目は、共通教育等の理念であるにもかかわらず、そう考えている学生は少ないということになる。

表Ⅱ-3-9 共通教育等の理念の理解（問1）

(1) 豊かな人間性を養うこと	734人 (37.7%)
(2) 学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身に付けること）	1607人 (82.6%)
(3) 様々な角度から物事を見ることができる能力を養うこと	993人 (51.0%)
(4) 自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと	386人 (19.8%)
(5) 自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることのできる能力を育てること	399人 (20.5%)
(6) 主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること	611人 (31.4%)
(7) 自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること	478人 (24.6%)
(8) 課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること	845人 (43.4%)
(9) 学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること	1332人 (68.4%)

6割以上の学生が選んでいる項目を見ると、「(2) 学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身に付けること）」(82.6%)と、「(9) 学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」(68.4%)である。したがって、多くの学生は、まずもって、「幅広い知識」、「基礎的な知識」を共通教育等の理念として理解している。それに続くのが、「(3) 様々な角度から物事を見ることができる能力を養うこと」(51.0%)および「(8) 課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」(43.4%)であるが、選んだ学生の割合は約半数である。「(1) 豊かな人間性を養うこと」は共通教育等の重要な理念であろうが、4割弱の学生しかそう考えていない。「(6) 主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」も、約3割(31.4%)にすぎない。「(7) 自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること」はさらに少なく、(24.6%)とほぼ4人に1人の割合でしかない。しかし、この課題探究能力の育成は、必ずしも共通教育等に限られるものではないだろう。学生もむしろ専門教育との関連で考えたという可能性もあるかも知れない。「(5) 自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることのできる能力を育てること」も選んだ学生は少なく、20.5%である。最も少なかったのは「(4) 自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」で、19.8%である。(7)の「課題探求能力」の場合とあわせて考えると、多くの学生は、自主的に課題を探求し、的確に判断する能力の育成は、必ずしも共通教育等の理念としては認知していないことになる。

以上のように、学生は共通教育等の理念の具体的な内容としては、「幅広い知識」、「基礎的な知識」を中心に考えており、「豊かな人間性」を理念として考えている者は4割弱、「自主的な課題探求」を理念として考えている者は少ない。

2) 共通教育等の理念に関する期待（問2）

次に問2では、問1の(1)～(9)のそれぞれの項目について、どの程度共通教育等

に期待するかを尋ねた。表Ⅱ-3-10はその集計結果である。

表Ⅱ-3-10 共通教育等の理念に関する期待（問2）

	とても期待する	ある程度期待する	あまり期待しない	全く期待しない
(1) 豊かな人間性	260人 (13.5%)	757人 (39.2%)	727人 (37.6%)	187人 (9.7%)
(2) 学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身に付けること）	921人 (47.7%)	852人 (44.1%)	129人 (6.7%)	28人 (1.5%)
(3) 様々な角度から物事を見ることができる能力	587人 (30.4%)	955人 (49.5%)	342人 (17.7%)	46人 (2.4%)
(4) 自主的・総合的に考え、的確に判断する能力	313人 (16.2%)	828人 (42.9%)	683人 (35.4%)	106人 (5.5%)
(5) 自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることの出来る能力	216人 (11.2%)	669人 (34.7%)	860人 (44.6%)	184人 (9.5%)
(6) 主体的に変化に対応する事のできる力	273人 (14.1%)	752人 (38.9%)	742人 (38.3%)	168人 (8.7%)
(7) 自ら将来の課題を探究することのできる力	351人 (18.2%)	715人 (37.0%)	669人 (34.6%)	197人 (10.2%)
(8) 課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力の育成	623人 (32.2%)	873人 (45.2%)	374人 (19.3%)	63人 (3.3%)
(9) 学問の基礎や土台をなす知識や技能	838人 (43.3%)	796人 (41.1%)	251人 (13.0%)	50人 (2.6%)

「とても期待する」と「ある程度期待する」を合わせた割合で見えていくと、6割以上の学生が選んだ項目は、「(2) 学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身に付けること）」、「(9) 学問の基礎や土台をなす知識や技能」、「(3) 様々な角度から物事をみることができる能力」、「(8) 課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力の育成」であり、「(4) 自主的・総合的に考え、的確に判断する能力」も59.1%の者が選んでいる。その他の項目も「(7) 自ら将来の課題を探究することのできる力」、「(6) 主体的に変化に対応することのできる力」、「(1) 豊かな人間性」はいずれも5割を越えた者が選んでおり、一番低い「(5) 自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることのできる能力」も45.9%が期待するとしている。

3) 共通教育等の理念の理解と期待（問1と問2）

さて、以上の前節および前々節で見た「共通教育等の理念の理解（問1）」と「共通教育等の理念に関する期待（問2）」の間には、どんな関係があるだろうか。一般的に考えれば、おそらく、ある共通教育等の理念を理解（認知）している者は、その理念を共通

教育等に対して期待する傾向があるのではないかということが予想されよう。そこで、この点を調べるために、問1の「(1)豊かな人間性を養うこと」で、この項目を共通教育等の理念として選んだ者は、問2の「(1)豊かな人間性」でも、これを共通教育等に期待すると回答する傾向があるかどうかを調べ、そのようにして(9)まで調べた。そこで、問1の(1)と問2の(1)をクロス集計して、 χ^2 検定を行い、(2)から(9)についても同様に統計的に分析した。その結果の表をすべてあげるには、少々分量が多くなりすぎるので、ここでははじめの(1)についてだけ表と χ^2 検定の結果を示し、残りの(2)から(9)に関しては注の形で本節末に結果だけをあげておきたい^(注1)。

表Ⅱ-3-11 豊かな人間性とその期待(問1と問2)

問1	問2	全く期待しない	あまり期待しない	ある程度期待する	とても期待する
豊かな人間性を養うこと	選択なし	164人(13.6)	574人(47.8)	411人(34.2)	53人(4.4)
	選択あり	23人(3.2)	153人(21.0)	346人(47.5)	207人(28.4)

$$\chi^2=352.2, df=3, p<0.01$$

表のように両方をクロス集計した結果、問1で「豊かな人間性を養うこと」を共通教育等の理念として選んだ者は、選ばなかった者に比べて、問2で「豊かな人間性を養うこと」を共通教育等に期待する傾向が見られた。つまり、ある共通教育等の理念を理念として認知している者ほどその理念に関して共通教育等に期待する傾向があるのである。逆に言うと、問1で「豊かな人間性を養うこと」を共通教育等の理念として選ばなかった者は、選んだ者に比べて、問2で「豊かな人間性」を養うことを共通教育等に期待する傾向は低いということになる。これは、しかし考えてみると、当然のことかも知れない。というのも、「豊かな人間性を養うこと」を共通教育等の理念であると考えている者はこれを共通教育等に期待し、そう考えていない者はこれを共通教育等に期待しないということであるからである。

同様に、(2)から(9)についても統計的に分析した。その結果、「(2)学問のすそ野を広げること(幅広い知識を身に付けること)」を共通教育等の理念であると考えている者はこれを共通教育等に期待する傾向があり等々、(2)から(9)までの共通教育等の理念全てに関してその知識を持ち、理解している者は、その項目に関して共通教育等に期待する傾向があるということが明らかになったのである((2)から(9)もすべて χ^2 検定の結果は1%水準で有意—注1を参照)。

この結果は共通教育等の改善ということを考える場合、非常に重要なことを示唆しているように思われる。つまり、この結果からすれば、共通教育等の理念を理解することがその理念を共通教育等に期待することにつながる(可能性がある)のであるから、共通教育等の理念を知らせ、理解させることは、共通教育等の授業改善にとって大いに役に立つであろうということである(理念の理解の重要性は、「共通教育等への意欲」との関係でも言える。「3. 授業への取り組みに関すること」70~71頁、参照)。

4) 共通教育等の理念に関して身につけている能力

問3では、以上のような共通教育等の理念をどの程度身につけているかを調べた。表Ⅱ-3-12はその集計結果である。

表Ⅱ-3-12 共通教育等の理念に関して身につけている能力（問3）

	よく身につけている	ある程度身につけている	あまり身につけていない	全く身につけていない
豊かな人間性	66人 (3.4%)	731人 (37.9%)	1019人 (52.8%)	115人 (6.0%)
学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身につけること）	48人 (3.4%)	638人 (33.0%)	1105人 (57.2%)	141人 (7.3%)
様々な角度から物事を見ることができる能力	93人 (4.8%)	656人 (33.9%)	1063人 (55.0%)	122人 (6.3%)
自主的・総合的に考え、的確に判断する能力	71人 (3.7%)	659人 (34.1%)	1033人 (53.4%)	170人 (8.8%)
自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることのできる能力	60人 (3.1%)	470人 (24.3%)	1120人 (58.0%)	282人 (14.6%)
主体的に変化に対応することのできる能力	88人 (4.6%)	636人 (32.9%)	1038人 (53.7%)	170人 (8.8%)
自ら将来の課題を探求することのできる能力	165人 (8.5%)	614人 (31.8%)	893人 (46.2%)	259人 (13.4%)
課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力の育成	55人 (2.8%)	518人 (26.8%)	1187人 (61.4%)	172人 (8.9%)
学問の基礎や土台をなす知識や技能	42人 (2.2%)	709人 (36.6%)	1031人 (53.3%)	153人 (7.9%)

いずれの質問事項に対しても、学生が最も多く選んだ選択肢は「あまり身につけていない」であり、次に多かったのが、これも全質問項目で一致して「ある程度身につけている」、3番目も全質問項目で一致して「全く身につけていない」、4番目も全質問項目で一致して「よく身につけている」である。このような特徴的な選択の傾向は、「よく身につけている」と「ある程度身につけている」を合わせた割合で見ても、この表で5割を越える質問項目がないという結果にもなっている。1番多い「豊かな人間性」で41.3%、2番目の「自ら将来の課題を探求することのできる能力」が40.3%である。共通教育等の理念としてあげたものを身につけているかという問の性質上、肯定的な答えは選びにくく、選択の傾向が「あまり身につけていない」に集中しがちになり、このような結果になったとも考えられよう。

5) 共通教育等への期待 (問6)

問6では、問5 (現に身につけている能力) と同じ項目に関して、今度はどの程度共通教育等へ期待するかを尋ねた。表Ⅱ-3-13はその集計結果である。

表Ⅱ-3-13 共通教育等への期待 (問6)

	とても期待する	ある程度期待する	あまり期待しない	全く期待しない
一般的な教養	456人 (23.5%)	1154人 (59.4%)	296人 (15.2%)	37人 (1.9%)
語学力	498人 (25.6%)	943人 (48.5%)	445人 (22.9%)	60人 (3.1%)
国際感覚	468人 (24.1%)	836人 (43.1%)	549人 (28.3%)	88人 (4.5%)
情報処理能力	670人 (34.5%)	834人 (42.9%)	377人 (19.4%)	61人 (3.1%)
創造力	246人 (12.7%)	714人 (36.8%)	795人 (40.9%)	187人 (9.6%)
忍耐力	173人 (8.9%)	695人 (35.8%)	849人 (43.7%)	227人 (11.7%)
統率力 (指導力)	165人 (8.5%)	552人 (28.4%)	930人 (47.9%)	295人 (15.2%)
協調性	239人 (12.3%)	836人 (43.0%)	691人 (35.5%)	180人 (9.2%)
チャレンジ精神	314人 (16.2%)	763人 (39.3%)	704人 (36.3%)	161人 (8.3%)
幅広い対応力	488人 (25.1%)	914人 (47.0%)	463人 (23.8%)	81人 (4.2%)
問題解決能力	508人 (26.1%)	873人 (44.9%)	466人 (24.0%)	98人 (5.0%)

ここでも「とても期待する」と「ある程度期待する」を合わせた割合で見えていくと、最も多くの学生が共通教育等に期待することとして選んだ項目は、「一般的な教養」で82.9%である。これは問5 (現に身につけている能力) では3位であり、学生は一般的な教養は割合身につけているが、同時に共通教育等に期待してもいるのである。

2番目に多いのは、「情報処理能力」で77.4%であるが、これは問5 (現に身につけている能力) では9位であった。すなわち、情報処理能力は学生はあまり身につけていないが、しかし、身につけたいと思っている項目であり、その筆頭に来ている。

また語学力も共通教育等への期待としては3位であるが (74.1%)、問5での身につけている能力としては10位であった。語学力も、学生は現に身につけていないが、身につけ

たいと思っている項目の2番目に来ている。

4位は「幅広い対応力」で72.1%、5位は「問題解決能力」で71.0%である。

6位は「国際感覚」で67.2%であるが、これも問5では11位であり、現に身につけているかどうかということと身につけたいという期待との差が大きい。「チャレンジ精神」、「協調性」、「創造力」、「忍耐力」は問5では上位を占めていた（順に4位、2位、5位、1位である）が、この問6では順に7位、8位、9位、10位である。この4つは現にある程度身につけており、特にそれ以上求める程ではないということだとも考えられよう。最後の11位が「統率力」であるが、これは問5では8位であった。これはあまり現に身につけているわけではないが、同時に身につけたいという希望も低いということになる。

以上のように、多くの学生が身につけたいと考えているのは「一般的な教養」、「情報処理能力」と「語学力」、「幅広い対応力」、「問題解決能力」、「国際感覚」等であるが、そのなかでも高い期待を持ちながら現実との落差が大きいのが「情報処理能力」と「語学力」である。この2つの項目に関しては特に、個々の教官の努力ももちろんではあるが、大学教育センターとしても十分な配慮がなされなければならないだろう。

6) 共通教育等に対する満足・不満足と要望（問18）

問18では、共通教育等に対する学生の満足・不満足と要望を、6項目あげて尋ねた。その6項目とは、「施設設備について」、「事務窓口について」、「講義規模について」、「シラバス」、「オフィスアワー」、「授業評価」であり、それぞれについて満足か不満足か尋ね、不満足の場合はその理由を自由に記述してもらった。このうち「講義規模」以外の5項目は本報告書の他の章で扱っている。したがって、ここではこの項目についてのみ検討する。

問18の(3)が「講義規模について」満足しているかという質問である。これに対して、「満足している」と答えた者は1511人(82.0%)、「不満である」が331人(18.0%)であった。不満である場合は、その理由を自由に記述してもらった。その中から主なもの(218人)を拾って、整理した結果、講義の規模が大きすぎると答えた者が130人、反対にもっと大きくすべきと答えた者が54人等となった。以下で、この結果をもう少し詳しく見てみたい。

「講義規模」について不満である理由として、(A)「規模が大きすぎる」と答えた者が127人で、これはここでとりあげた主な回答の全体の人数218人に対して58%であり、講義規模を不満とする理由で最も多いものである。そのうち、(a-1)「人数が多すぎる」、「大きすぎる」、「定員が多すぎる」等、端的に大きい、多いということを指摘した者が52人である。また、このことを「もっと小さく、少人数にすべき」と表現した者もあり、これは16人である。特に「語学」と言及してもっと少人数にしてほしいとした者が3人いた。

(a-2)「多すぎる」、「大きすぎる」を不満とする理由として、大人数(大教室)だと「先生の声が聞きづらい」、「黒板の字が見づらい」をあげた者が43人いる。その中にはマイクの使用に言及している者(3人)や、スライド(1人)やOA機器(1人)が見にくいとした者がいる。(a-3)「多すぎる、大きすぎる」ことによる問題点を指摘した者が15人いる。たとえば、大人数だと「騒がしい、落ち着かない、気が散る」(9人)、「質問がしにくい」(1人)、「討論などができない」(1人)、「どうしても受け身になる」(1人)等。

(B)「教室がせまい」ことを、「講義規模」について不満である理由としてあげた者が、

25人いる（11%）。これは講義規模が「大きすぎる、人数を多くとりすぎる」という意味にも解せる可能性があるかも知れないが、「もっと大きい講義室にしてほしい」という不満理由もここで含めて考え、「教室の割に人数が多い」という不満として、ここでは扱っておきたい。この点で不満であるとした者は25人である。いくつかあげてみると、「教室が狭い」（7人）、「教室の割に人数が多い」（15人）、「もっと大きい講義室にしてほしい」（3人）等である。

（C）不満理由として、「教室の大きさと人数のアンバランス」をあげた者も12人いる（6%）。しかし、初めから定員の少ない授業に広い教室が割り当てられていることはむしろ例外的でそう多くない。したがって、これは、定員に対して登録者が少なかったという可能性、あるいは定員は満たしたが出席率が悪いという可能性等が考えられる。いずれにせよ、授業効率、教室の有効利用等の観点から言って、その理由は検討してみる必要があるだろう。

（D）不満理由として講義規模が「小さい」をあげた者、また「とりたい授業がとれなかった」ため「もっととる人数を増やしてほしい、講義規模を大きくしてほしい」という要望を述べている者が54人いる（25%）。（d-1）講義規模が「小さい、大きい方がよい」、人数が「少ない」等を不満理由としてあげた者は18人である。このなかには、外国語はもう少し人数が多くてもよいとした者が4人いた。（d-2）「とりたい授業がとれなかった」ため「もっととる人数を増やしてほしい、講義規模を大きくしてほしい」は36人である（17%）。いくつか取り上げて見てみると、「定員をもっと増やしてほしい。広い教室で講義してほしい」、「定員の上限をなくしてほしい」、「大きい講義室をつかってほしい」等がある。しかし、「人数超過で登録できない講義の組数を増やして欲しい」という意見もあり、この36人の中には、単にある授業の定員を増やして、大教室で行い、多くの登録希望者を受け入れることができるようにしてほしいという意見の者だけではないということも留意しておきたい。（はっきり「組数を増やして欲しい」と言う意味に読めるのは2人であるが、「人気のあるものはもうすこしふやして」等のどちらともとれる書き方の者も数人いる）。

以上のように講義規模について見てみると、学生は基本的にはやはり大教室の大人数の講義に対しては不満を抱きがちであると言えよう。しかし、他方では、とりたい授業をとれるようにしてもらいたいという要望も強く、そのためであれば大教室の大人数の授業も仕方がないと考えている者も少なくない。相反する面の強いこの二つの要望にどう応えていくのか、大学教育センターとしての検討が必要であろう。

3. 授業への取り組みに関すること

1) 授業に対する意欲（問4）

問4では、学生の授業に対する意欲を調べた。表Ⅱ-3-14はその集計結果である。

ここでも、「とてもそう思う」と「ある程度そう思う」を合計した割合で見ていきたい。表にはっきり現れている大きな特徴は、学部の専門教育に対する意欲の高さであろう。「学

部の専門教育全般について積極的に取り組みたい」が92.9%であり、「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係するものについては積極的に取り組みたい」が89.3%、「早く専門教育に本格的に取り組むたい」が72.2%である。それに対して、「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は66.6%、「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係しないものについても積極的に取り組みたい」は65.5%である。

表Ⅱ-3-14 授業に対する意欲（問4）

	とてもそう 思う	ある程度そ う思う	あまりそう 思わない	全くそう思 わない
共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい	311人 (16.1%)	977人 (50.5%)	546人 (28.2%)	102人 (5.3%)
学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい	1181人 (61.0%)	617人 (31.9%)	126人 (6.5%)	12人 (0.6%)
共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係するものについては積極的に取り組みたい	1009人 (52.3%)	715人 (37.0%)	190人 (9.8%)	17人 (0.9%)
共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係しないものについても積極的に取り組みたい	390人 (20.1%)	880人 (45.5%)	535人 (27.6%)	131人 (6.8%)
共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい	560人 (28.9%)	545人 (28.2%)	646人 (33.4%)	184人 (9.5%)
早く専門教育に本格的に取り組むたい	750人 (38.8%)	646人 (33.4%)	479人 (24.8%)	60人 (3.1%)
共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい	682人 (35.2%)	656人 (33.9%)	510人 (26.3%)	89人 (4.6%)

このように、学部の専門科目については学生の学習意欲は全般に高いが、共通教育等の科目に関しては必ずしも意欲は高いとは言えず、課題や科目数を負担に感じている学生も多い。学生の共通教育等への意欲を高めるための一層の努力が求められる。

ところで、そのように学生の意欲を高めるための努力は、共通教育等を担当する個々の教官の一層の工夫によるべきところも大ではあるが、しかし、大学教育センターとしての取り組みも当然なされなければならないだろう。その一つの方向性は、すでに見たように（「②共通教育等に対する意識に関すること」の「共通教育等の理念の理解と期待」63～64頁）、共通教育等の理念を学生に理解させることによって共通教育等への期待を高めることができる可能性があるという分析結果に示されている。つまり、この点に関して大学教育センターとして、共通教育等の理念を学生に知らせ、理解させることによって、共通教育等に対する学生の期待を高める努力をするという方法があるということであった。

この共通教育等の理念を理解させることの重要性は、目下考察中の「授業に対する意欲（問4）」との関連でも、さらに、明らかになる。次に、この点を検討したい。

2) 共通教育等の理念の理解と授業に対する意欲 (問1と問4)

共通教育等の理念の理解と共通教育等に対する意欲との関係を調べるために、問1と問4をクロス集計し、 χ^2 検定を行った。結論を先に言えば、共通教育等の理念を理解している者ほど共通教育等に対する「意欲」が高い傾向がある。問1と問2のクロス集計では、理念を理解させることによって「期待が高まる」傾向があるということであったが、この問1と問4のクロス集計では、理念を理解している者ほど「意欲が高い」傾向があることが明らかになったのである。

クロス集計と χ^2 検定は問1と問4の全項目に関して行ったが、問1が9項目、問4が7項目であるから、結果として63の表ができた。そのすべてをここであげることはできない。そこで、共通教育等と最も関連する2項目、つまり「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係しないものについても積極的に取り組みたい」と問1のクロス集計結果をあげ、表も初めの一つだけを示しておきたい。残りの結果については、注の形で本章末に示した^(注2)。

表Ⅱ-3-15 「豊かな人間性を養うこと」(問1)と
「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」(問4)

		共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい			
		全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
豊かな人間性を養うこと	選択なし	76人 (6.3%)	373人 (31.0%)	597人 (49.5%)	159人 (13.2%)
	選択あり	26人 (3.6%)	173人 (23.7%)	380人 (52.0%)	152人 (52.0%)

$$\chi^2 = 32.0, df = 3, p < 0.01$$

表のように、「豊かな人間性を養うこと」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」とをクロス集計した結果、問1で「豊かな人間性を養うこと」を共通教育等の理念であると答えた者は、問4で「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」を肯定する傾向が見られた。したがって、共通教育等の理念の理解と共通教育等を学ぶことへの意欲とは密接に関連しており、理念を理解させることで学ぶ意欲が高まる可能性があるのである^(注3)。

表は省略するが、以下同様にクロス集計した結果、問1で「学問のすそ野を広げること(幅広い知識を身につけること)」を共通教育等の理念であると答えた者も、問4で「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」を肯定する傾向があり(1%水準で有意)、問1で「様々な角度から物事を見ることが出来る能力を養うこと」を共通教育等の理念であると答えた者も、問4で「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」を肯定する傾向があり(1%水準で有意)、このことは実に問1の残りの6項目すべてについて同様であることが明らかになったのである。つまり、全体的に言って、共通教育等の理念(問1の9項目)を理解している者は、「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」を肯定する傾向があり、共通教育等に対する意欲が高い傾向があるの

である。

さらに、同様の傾向は、「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係しないものについても積極的に取り組みたい」と理念の関係についても見られる。つまり、問1で「豊かな人間性を養うこと」を共通教育等の理念であると答えた者は、問4で「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係しないものについても積極的に取り組みたい」と答える傾向があることが、クロス集計の結果明らかになり（1%水準で有意）、また問1で「学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身につけること）」を共通教育等の理念であると答えた者も、問4で「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」を肯定する傾向があり（1%水準で有意）、問1で「様々な角度から物事を見ることが出来る能力を養うこと」を共通教育等の理念であると答えた者も、問4で「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」を肯定する傾向があり（1%水準で有意）、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」の場合を除いて（これは有意ではないという結果になった）、問1の残りの項目に関してもすべて有意な傾向があることが明らかになったのである。

したがって、以上のことから、共通教育等の理念について理解している者は、「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」という意欲を持つ傾向があるし、「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関係しないものについても積極的に取り組みたい」という意欲を持つ傾向があると言える。

すでに、共通教育等の理念を学生に理解させることによって共通教育等への学生の「期待」を高めることができる可能性があるというこのことを見たが、ここでさらに理念を理解させることによって、共通教育等への「意欲」を高めることができる可能性もあるということが明らかになったわけである。

共通教育等に対する学生のモチベーションをいかに高めるかは大いに苦勞するところであろうが、ここにその一つの（唯一ではないにしても）方向性が示されている。個々の共通教育等の担当教官の努力もさることながら、大学教育センターとしても、共通教育等の理念を学生に知らせ、理解させる努力を組織的に行うことによって、学生の共通教育等への期待や意欲を高めるということを行う必要があるのではないだろうか。

3) 満足度（問9）

問9では、2年次以上の学生を対象に、大学教育や大学生生活等に関する満足度を調べた。そのうち共通教育等に関連する項目の集計結果は、次頁の表Ⅱ-3-16に示す通りである。

この問9は、初めに述べたように2年次以上の学生が対象であるが、共通教育等に対する満足度を見てみると、「とてもそう思う」と「ある程度そう思う」を合わせて、ちょうど50%である。「全くそう思わない」を選んだ者も1割弱（9.6%）いる（他方、専門教育に関しては、59.5%の者が満足度に関して肯定的である）。学生が満足できる授業を提供する一層の努力が求められる。

学習に関しては、「十分に学ぶことができているという充実感を持っている」かどうかも尋ねたが、肯定的な者は38.0%であり、「あまりそう思わない」を選んだ者が49.3%である。この質問は特に共通教育等に限っているわけではないが、共通教育等の改善を考える上でも参考にすべきものであろう。

表Ⅱ-3-16 共通教育等に対する満足度（問9）

	とても そう 思う	ある程度 そう 思う	あまり そう 思わない	全く そう 思わない
全体的に共通教育等に満足している	30人 (4.3%)	316人 (45.7%)	279人 (40.4%)	66人 (9.6%)
全体的に専門教育に満足している	66人 (9.6%)	344人 (49.9%)	234人 (34.0%)	45人 (6.5%)
全体的に、本学の教育施設・設備に満足している	44人 (6.4%)	267人 (38.8%)	283人 (41.1%)	94人 (13.7%)
大学での学生生活に満足している	100人 (14.5%)	338人 (48.9%)	199人 (28.8%)	54人 (7.8%)
大学での人的交流に満足している	118人 (17.1%)	296人 (43.0%)	218人 (31.6%)	57人 (8.3%)
大学外での人的交流に満足している	96人 (13.9%)	205人 (29.8%)	285人 (41.4%)	103人 (14.9%)
大学の雰囲気満足している	68人 (9.8%)	306人 (44.3%)	252人 (36.5%)	65人 (9.4%)
もし、もう一度大学に入学するとしたら琉球大学に入学したい	84人 (12.2%)	236人 (34.3%)	241人 (35.0%)	128人 (18.6%)
自分の子供が琉球大学に入学を希望したら入学をすすめる	114人 (16.5%)	320人 (46.4%)	181人 (26.2%)	75人 (10.9%)
十分に学ぶことができているという充実感を持っている	39人 (5.7%)	223人 (32.3%)	340人 (49.3%)	88人 (12.8%)

4) 授業理解度（その1）（問11）

問11と問12では、学生の授業の理解度を調べたが、まず問11から検討したい。

問11では2年次以上の学生を対象に、1年次の時に受講した共通教育等科目についてのくらいついていけた（理解できた）かを学科目ごとに尋ねた。表Ⅱ-3-17はその集計結果である。

共通教育等の科目のうち、2年次以上の学生でついていけた（理解できた）と答えた者が一番多かったのは「健康運動系の科目」で、「ついていけた」と「ある程度ついていけた」を合わせて88.8%である。これは、「全くついていけなかった」を選んだ者が3.4%いるとはいえ、ひとまず十分な数値であろう。続けて順に見ていくと、2位が「人文系科目」（77.4%）、3位が「総合科目」（74.8%）、続いて、4位が「情報関係科目」（73.5%）、5位が「琉大特色科目」（72.5%）、6位が「社会系科目」（71.6%）、7位は「自然系科目」（62.8%）、8位は「外国語科目」（62.6%）である。

表Ⅱ-3-17 授業理解度（その1）（問11）

	ついていけた	ある程度ついていけた	あまりついていけなかった	全くついていけなかった
人文系科目	150人 (24.0%)	333人 (53.4%)	111人 (17.8%)	30人 (4.8%)
社会系科目	144人 (23.2%)	300人 (48.4%)	141人 (22.7%)	35人 (5.6%)
自然系科目	120人 (20.4%)	249人 (42.4%)	152人 (25.9%)	66人 (11.2%)
健康運動系科目	321人 (52.0%)	227人 (36.8%)	48人 (7.8%)	21人 (3.4%)
総合科目	128人 (22.7%)	294人 (52.1%)	108人 (19.1%)	34人 (6.0%)
琉大特色科目	126人 (22.7%)	277人 (49.8%)	101人 (18.2%)	52人 (9.4%)
情報関係科目	206人 (34.0%)	239人 (39.5%)	125人 (20.7%)	35人 (5.8%)
外国語科目	120人 (19.0%)	275人 (43.6%)	185人 (29.3%)	51人 (8.1%)

63～64頁で見たように、語学力は、学生が現に身につけてはいないが身につけたいという期待の高いものである。そのような学生の要望に応えるべく、すでに、大学教育センターと琉球大学英語系教育・カリキュラム委員会とが共同でFD活動を開始しており、その成果は「教養英語教育の改善に関する研究」（2000年3月）としてまとめられている。「外国語科目」は学生の期待が高い科目でもあり、個々の教官の努力ももちろんではあるが、大学教育センターとしても引き続き組織的な支援を行う必要があるだろう^{〔注4〕}。

5) 授業理解度（その2）（問12）

問12では、問11と同じ質問項目で、1年次の学生を対象に、初めて共通教育等の科目を受講し、数回の授業を受けた時点で（調査が行われたのは5月）、どの程度授業についていけそうか（理解できそうか）を調べた。それによって、学生が比較的スムーズにスタートを切れている科目群はどれで、反対にスタートから躓きがちな科目群はどれかが分かることになる。表Ⅱ-3-18はその集計結果である。

1年次の学生で、共通教育等の授業でついていけそう（理解できそう）なものは、やはり「健康運動系の科目」が一番多く、「ついていけた」と「ある程度ついていけた」を合わせると、9割以上の学生がスムーズにスタートを切っている（問11の2年次以上でも、1位）。2位が「人文系科目」で77.8%（問11でも2位）、3位が「総合科目」で77.4%（問11でも3位）、4位が「社会系科目」で75.7%（問11では6位）、5位が「情報関

係科目」で75.0%（問11では4位）、6位が「琉大特色科目」で70.7%（5位）であり、7割台の学生はスムーズにスタートを切っている。7位は「自然系科目」で67.2%（問11でも7位）、8位は「外国語科目」で65.4%（問11でも8位）である。

表Ⅱ-3-18 授業理解度（その2）（問12）

	ついてい けそうだ	ある程度ついて いけそうだ	あまりついてい けそうにない	とてもついてい けそうにない
人文系科目	298人 (23.6%)	684人 (54.2%)	240人 (19.0%)	41人 (3.2%)
社会系科目	268人 (21.4%)	681人 (54.3%)	253人 (20.2%)	53人 (4.2%)
自然系科目	199人 (17.7%)	558人 (49.5%)	290人 (25.7%)	80人 (7.1%)
健康運動系科目	667人 (54.3%)	474人 (38.6%)	72人 (5.9%)	16人 (1.3%)
総合科目	180人 (16.2%)	681人 (61.2%)	219人 (19.7%)	32人 (2.9%)
琉大特色科目	200人 (19.2%)	535人 (51.5%)	248人 (23.9%)	56人 (5.4%)
情報関係科目	287人 (24.3%)	598人 (50.7%)	245人 (20.8%)	50人 (4.2%)
外国語科目	210人 (15.9%)	656人 (49.5%)	373人 (28.2%)	85人 (6.4%)

1年次の学生がスムーズに大学の（共通教育等の）授業に入っているか、言い換えるとスタート時点で早くもつまづきがちな科目はないか、ということは共通教育等の授業改善ということを考えるとき、重要な点の一つであろう。その意味で、パーセントの数字だけで一概に評価することはできないにしても、これは参考にすべき一つのデータであろう^(注5)。

6) 教員への期待（問13）

問13では、共通教育等を担当する教員に関して、主に授業で学生が重視するものは何か調べた。表Ⅱ-3-19はその集計結果である。

ここでも、「とても重要」と「ある程度重要」を合わせた割合で見ると、9割以上の学生が重視しているのは、「授業内容がわかりやすい」（96.5%）、「授業の内容が役に立つ」（92.3%）、「学生の立場になって考えること」（90.6%）である。「暖かく親切な人柄である」（89.6%）、「授業に熱心に取り組む」（89.0%）、「学生の質問や意見に関心を持つ」（88.4%）、「ユーモアのセンスを持っている」（87.7%）、「授業への造詣が深い」（84.4%）

も、8割以上の学生が重要と考えている。また、「授業の準備が周到である」(76.8%)、「倫理観を身につけている」(74.5%)は7割以上の学生が重要としている。

表Ⅱ-3-19 教員への期待 (問13)

	とても重要	ある程度重要	あまり重要ではない	全く重要ではない
授業内容への造詣(ぞうけい)が深い	584人 (30.4%)	1037人 (54.0%)	268人 (13.9%)	33人 (1.7%)
授業の準備が周到である	543人 (28.1%)	942人 (48.7%)	414人 (21.4%)	35人 (1.8%)
授業の内容が役に立つ	1286人 (66.4%)	502人 (25.9%)	130人 (6.7%)	19人 (1.0%)
学生の質問や意見に関心を持つ	898人 (46.4%)	814人 (42.0%)	200人 (10.3%)	24人 (1.2%)
授業に熱心に取り組む	951人 (49.1%)	772人 (39.9%)	184人 (9.5%)	28人 (1.4%)
ユーモアのセンスを持っている	1058人 (54.6%)	642人 (33.1%)	200人 (10.3%)	37人 (1.9%)
暖かく親切な人柄である	1105人 (57.0%)	631人 (32.6%)	170人 (8.8%)	31人 (1.6%)
学生の立場になって考えること	1117人 (57.7%)	637人 (32.9%)	142人 (7.3%)	40人 (2.1%)
授業以外の場面における接触	400人 (20.7%)	817人 (42.2%)	600人 (31.0%)	120人 (6.2%)
視聴覚機器の活用に精通している	320人 (16.5%)	738人 (38.1%)	719人 (37.1%)	161人 (8.3%)
倫理観を身につけている	582人 (30.0%)	862人 (44.5%)	413人 (21.3%)	80人 (4.1%)
小集団討議を導入している	209人 (10.8%)	650人 (33.6%)	863人 (44.6%)	213人 (11.0%)
授業内容がわかりやすい	1613人 (83.2%)	257人 (13.3%)	53人 (2.7%)	15人 (0.8%)

以上をまとめると、学生が求めている共通教育等を担当する教員像は、分かりやすくかつ役に立つ授業を行い、授業への造詣が深くまた熱心で、学生の立場に立って質問等によく耳を傾け、暖かく親切で、ユーモアがあり、倫理観を身につけているということになるだろう。

<注>

注1) (2) から (9) に関する χ^2 検定の結果は次の通りである。

「(2) 学問のすそ野を広げること (幅広い知識を身に付けること)」について、問1と問2をクロス集計し χ^2 検定を行った結果は、 $\chi^2=248.5$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(3) 様々な角度から物事を見ることができる能力を養うこと」では、 $\chi^2=264.2$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(4) 自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」では、 $\chi^2=188.9$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(5) 自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることの出来る能力」では、 $\chi^2=363.0$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(6) 主体的に変化に対応する事のできる力」では、 $\chi^2=132.9$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(7) 自ら将来の課題を探求することのできる力」では、 $\chi^2=337.8$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(8) 課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力の育成」では、 $\chi^2=337.7$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「(9) 学問の基礎や土台をなす知識や技能」では、 $\chi^2=484.3$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ であり、いずれも統計的に1%水準で有意である。

注2) 「共通教育等の理念の理解と授業に対する意欲」に関して、問1と問4をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果は、次の通りである。

問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(1)の「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」の検定結果は、本文中に示したがあらためてあげておくと、 $\chi^2=32.0$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 。「学問のすそ野を広げること (幅広い知識を身に付けること)」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=35.3$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「様々な角度から物事を見ることができる能力を養うこと」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=20.2$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=10.1$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることのできる能力を育てること」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=8.7$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=14.4$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=18.9$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=19.5$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身に付けること」と「共通教育等の科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=25.7$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ である。

問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(2)の「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=0.896$ (n.s.)。「学問のすそ野を広げること (幅広い知識を身に付けること)」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=0.372$ (n.s.)、「様々な角度から物事を見ることができる能力を養うこと」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=0.385$ (n.s.)、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=0.370$ (n.s.)、「自分の知識や人生を社会との関係で位置づけることのできる能力を育てること」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=$

0.850 (n.s.)、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=0.826$ (n.s.)、「自ら将来の課題を探究することのできる力を育成すること」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $p=0.479$ (n.s.)、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=22.0$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」と「学部の専門科目全般について積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=9.6$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ である。

問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(3)の「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は、 $p=0.163$ (n.s.)、「学問のすそ野を広げること(幅広い知識を身につけること)」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は、 $p=0.416$ (n.s.)、「様々な角度から物事を見ることが出来る能力を養うこと」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は、 $p=0.572$ (n.s.)、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は、 $p=0.527$ (n.s.)、「自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる能力を育てること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は、 $p=0.680$ (n.s.)、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は、 $p=0.369$ (n.s.)、「自ら将来の課題を探究することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は $\chi^2=2.5$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は $\chi^2=9.8$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連するものについては積極的に取り組みたい」は $\chi^2=10.391$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ である。

問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(4)の「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=25.9$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「学問のすそ野を広げること(幅広い知識を身につけること)」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=28.5$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「様々な角度から物事を見ることが出来る能力を養うこと」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=21.2$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $p=0.119$ (n.s.)、「自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる能力を育てること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=15.4$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「共通教育等の

科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=11.8$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=24.2$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=35.3$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」と「共通教育等の科目のうち、自分の専門に直接関連しないものについても積極的に取り組みたい」は、 $\chi^2=12.5$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ である。

問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(5)の「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=13.3$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身につけること）」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=21.6$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「様々な角度から物事を見ることが出来る能力を養うこと」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=12.7$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.233$ (n.s.)、「自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる能力を育てること」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.815$ (n.s.)、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.198$ (n.s.)、「自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=22.3$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.142$ (n.s.)、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」と「共通教育等の科目数の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.386$ (n.s.)である。

問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(6)の「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $p=0.567$ (n.s.)、「学問のすそ野を広げること（幅広い知識を身につけること）」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $\chi^2=17.2$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「様々な角度から物事を見ることが出来る能力を養うこと」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $p=0.407$ (n.s.)、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $p=0.807$ (n.s.)、「自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる能力を育てること」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $p=0.192$ (n.s.)、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $p=0.181$ (n.s.)、「自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $\chi^2=9.4$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $p=0.791$ (n.s.)、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」と「早く専門教育に本格的に取り組むたい」は、 $\chi^2=6.4$ 、 $df=3$ 、 $p<0.10$ である。問1の「豊かな人間性を養うこと」と問4-(7)の「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=10.6$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「学問のすそ野を広げること（幅

広い知識を身につけること」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=12.6$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「様々な角度から物事を見ることができる能力を養うこと」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=17.4$ 、 $df=3$ 、 $p<0.01$ 、「自主的に考え、的確に判断する能力を養うこと」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=9.9$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる能力を育てること」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.279$ (n. s.)、「主体的・総合的に変化に対応することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.815$ (n. s.)、「自ら将来の課題を探求することのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $\chi^2=9.0$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ 、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力を育成すること」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.662$ (n. s.)、「学問の基礎や土台をなす知識や技能を身につけること」と「共通教育等の科目の課題の負担を減らしてほしい」は、 $p=0.684$ (n. s.) である。

注3) もちろん、 χ^2 検定の結果からは、逆に、共通教育等への意欲が高い者ほど共通教育等の理念を理解している傾向があるとも言える。したがって、厳密には、理念の理解が意欲を高めることにつながっているのか、意欲の高さが理念の理解につながっているのかは決定しがたい。しかし、そのようなどちらか（あるいは両方向）の可能性があるのであり、本文中では授業改善の方法につなげるという観点から、一つの可能性である「理念の理解が意欲を高めることにつながる」ということを指摘しておきたい。

注4) 2年次以上の学生の授業理解度に関して、さらに、学部によって違いがあるかどうかを知るために、学生の所属学部と今の問11をクロス集計し、分析した。つまり、人文系科目の理解度に関して法文学部から農学部までの6学部で違いがあるかどうか、社会系科目の理解度に関して法文学部から農学部までの6学部で違いがあるかどうか等、外国語科目までの8科目について学部による違いを調べてみた。

結果は、人文系科目、社会系科目、自然系科目、琉大特色科目、外国語科目で χ^2 検定が有意で、学部によって理解度に違いがあり、健康運動系科目、総合科目、情報関係科目は有意ではなく、学部によって理解度に違いはなかった。

ここですべての分析結果と考察を示すことはできないので、人文・社会系の学部として法文学部、自然系の学部として工学部と農学部を取り上げて、あらたにクロス集計し、簡単に結果を示しておきたい（教育学部、理学部、医学部は回答した学生の数が少な目であったので、ここでは置いておく）。

まず、人文系科目と法・工・農学部のクロス集計であるが、次の表がその結果である。

表のようにクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、人数の偏りは有意であり（ $\chi^2=42.2$ 、 $df=6$ 、 $p<0.01$ ）、法文学部の学生は人文系科目についていけた者が多いという傾向があり、反対に工学部と農学部の学生は人文系科目についていけた者が少な目であるという傾向が見られる。

法・工・農学部と人文系科目の授業理解度（2年次以上の学生）

	ついていけた	ある程度ついていけた	あまりついていけなかった	全くついていけなかった
法文学部	78人 (35.8%)	111人 (50.9%)	24人 (11.0%)	5人 (2.3%)
工学部	32人 (15.6%)	106人 (51.7%)	50人 (24.4%)	17人 (8.3%)
農学部	14人 (14.7%)	54人 (56.8%)	23人 (24.2%)	4人 (4.2%)

$$\chi^2=42.2, p<0.01$$

次に社会系科目と法・工・農学部のクロス集計であるが、これも人数の偏りは有意であり（ $\chi^2=47.9$ 、 $df=6$ 、 $p<0.01$ ）、法文学部の学生は社会系科目についていけた者が多いという傾向があり、反対に工学部と農学部の学生は社会系科目についていけた者が少ない目であるという傾向が見られる（表は省略）。

自然系科目と法・工・農学部のクロス集計においても、人数の偏りは有意であり（ $\chi^2=35.3$ 、 $df=6$ 、 $p<0.01$ ）、法文学部の学生は自然系科目についていけた者が少ない目であるという傾向があり、反対に工学部と農学部の学生は自然系科目についていけた者が多いという傾向が見られる（表は省略）。

注5) 1年次以上の学生の授業理解度に関して、さらに、学部によって違いがあるかどうかを知るために、学生の所属学部と今の問11をクロス集計し、分析した。つまり、人文系科目の理解度に関して法文学部から農学部までの6学部で違いがあるかどうか、社会系科目の理解度に関して法文学部から農学部までの6学部で違いがあるかどうか等、外国語科目までの8科目について学部による違いを調べてみた。

結果は、人文系科目、社会系科目、自然系科目、総合科目、琉大特色科目、外国語科目、情報関係科目で χ^2 検定が有意で、学部によって理解度に違いがあり、健康運動系科目は有意ではなく、学部によって理解度に違いはなかった。

ここですべての分析結果と考察を示すことはできないので、2年次以上の学生の場合と同様に（前注参照）、人文・社会系の学部として法文学部、自然系の学部として工学部と農学部を取り上げて、あらたにクロス集計し、簡単に結果を示しておきたい。

まず、人文系科目と法・工・農学部のクロス集計であるが、次の表がその結果である。

表のようにクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、人数の偏りは有意であり（ $\chi^2=58.2$ 、 $df=6$ 、 $p<0.01$ ）、法文学部の学生は人文系科目についていけそうだとする者が多いという傾向があり、反対に工学部と農学部の学生は人文系科目についていけそうだとする者が少ない目であるという傾向が見られる。

法・工・農学部と人文系科目の授業理解度（1年次の学生）

	ついていけ そうだ	ある程度ついで いけそうだ	あまりついて いけそうにない	とてもついてい けそうにない
法文学部	129人(28.9%)	240人(54.1%)	72人(13.4%)	9人(2.0%)
工学部	41人(14.1%)	150人(51.5%)	86人(29.6%)	14人(4.8%)
農学部	22人(19.0%)	62人(53.4%)	25人(21.6%)	7人(6.0%)

$$\chi^2=58.2、p<0.01$$

次に社会系科目と法・工・農学部のクロス集計であるが、これも人数の偏りは有意であり（ $\chi^2=31.0$ 、 $df=6$ 、 $p<0.01$ ）、法文学部の学生は社会系科目についていけそうだとする者が多いという傾向があり、反対に工学部と農学部の学生は社会系科目についていけそうだとする者が少な目であるという傾向が見られる（表は省略）。

自然系科目と法・工・農学部のクロス集計においても、人数の偏りは有意であり（ $\chi^2=32.9$ 、 $df=6$ 、 $p<0.01$ ）、法文学部の学生は自然系科目についていけそうだとする者が少な目であるという傾向があり、反対に工学部と農学部の学生は自然系科目についていけそうだとする者が多いという傾向が見られる（表は省略）。